



北海道のつつじ
原 秀 雄

単にさくらという植物がないと同じように、つつじという名の植物もない。尤もヤマツツジの一名をツツジとも称ぶが、それはとにかくとして、さくらもつつじも共にその類の総称である。ツツジはツツジ科の灌木で、この名がわが国の文献に現われたのは甚だ古く、すでに万葉集、新撰字鏡などに載り、新撰字鏡には豆々自とあつて、これを槃の字に当てており、万葉集には都追慈を当て、ニツツジ、イハツツジ、シラツツジなどの名が見え、ニツツジは今のヤマツツジ、イハツツジはモチツツジであるとされている。

北海道に自生するツツジには、常緑で春花の早いエゾムラサキツツジ、落葉性で亜高山帯に生じ、薄紫の花を前者につづいて咲くムラサキヤシオツツジ、更にこれにつづいて山野の各地に生じ、半落葉で赤い花を開くヤマツツジ、これと殆ど同時に赤樺の花をもつ落葉のレンゲツツジ、高い所では亜高山帯にまで生じ、白い極めて小さい花を枝頭につけるコマツツジ、道東の湿地に生ずる常緑のサカイツツジなどがある。ジャクナゲの類もまたツツジと同じ類の植物で、高山帯のキバナジャクナゲ、亜高山帯のハクサンジャクナゲやシロバナジャクナゲなどを見るが、ジャクナゲの類に就てはまた後日のこととしたい。また高山帯の落葉小灌木エゾツツジも亦ツツジの類とされてはいるが、これは稍特殊の植物である。エゾムラサキツツジは蝦夷紫ツツジで、花の色が紫色なのをその名のもととする。

ムラサキヤシオは紫八塩、または紫八入、紫弥入で、幾度も染汁に浸して紫に染めたという意、薄いが広い葉をもつ。ヤマツツジは山ツツジで、山地にあるツツジという程のころである。これの古い名ニツツジは丹ツツジで、赤いツツジの意であり、アカツツジの名もあるが、これの白花の一品があり、また花冠を欠き、赤い芯のみが立っているものもある。レンゲツツジは蓮華ツツジで、花が枝頭に簇り生ずるのを斯く見立てたものであろう。これの一品に花の黄色なキングツツジがある。コマツツジは米ツツジで、花が極めて小さく、白いのを米粒に見立てた名である。ヤマツツジにはムラサキヤマツツジ、サンヨウヤマツツジ、イエザキヤマツツジ、タチセンエ、ヒメヤマツツジ、エゾヤマツツジ、オオシヤマツツジ、四季咲ヤマツツジなどの品があり、またキリシマツツジ（キリシマ）もヤマツツジを母種とすると考えられている。

これ等のほかに、かなり大株となり、葉も大きく薄紅紫の花をさくクロフネツツジ。チョウセンヤマツツジの八重咲品で、紫の花のあるヨドガワツツジ、一名ボタンツツジなどが庭に見られる。またサツキツツジ（サツキ）オランダツツジ（俗にアザシア）なども鉢植として観賞され、またアカギツツジ、コバノミツバツツジなども稀に庭に植付けられる。

貝原益軒の花譜（元禄十一（一六九八）年刊）の『躑躅』の項に「前略、万の木は陰地をいむ。只つつじはひかげによし。砂によるしからず。はなはだ湿土を忌む。しかれども夏は水をしばしばそぐべし。おほくそそぎ湿おほければいたむ。花おちてすなはち其あとをつみさるべし。木さかふるなり。葉に水をそぐべからず。水をそげば葉いたむ。つつじの地はかたくなればあしし。山つつじいろいろあり。ひとへにして赤きはいづくにも多し。（中略）つつじのさしやう。林下の木葉のくさりたる所の肥土を取て細末し。ふるひにてふるひ。つつじの枝を三、四寸ほどにきりて。右の土にさすべし。しばしば水を洗（きそ）べし。日おほひし。或ひは日かげにさす。必活く。又田土を用ひて日かげにさせばかならず活く。米春芽を生ず。〇つつじをさす法。新芽の長じてのびたるときよし。青年の新枝を短くきりてさすべし。節気の遅速によりて。五月の半あるひは下旬六月上旬なるべし。ふる枝あしし。又法。ねばき赤土を日にほし。よくくだき。砂と等分にこまかにしてふるひあはせ。かねてよりあつく敷おきて。これにさす。ときどき水をそそぎ。日覆すべし。百さして百ながら活く。或曰。枝を土にうへて土をかけてよし。云々（見易くするため濁点を施した）とあり、三之丞の花壇地錦抄には『躑躅のるひ』として『つつじのるひハ長生花林抄といふ五冊の双紙に花形を図にあらはしくわしくしるし前にひろむゆへ爰にハ略してわづかにその事を記す』として、一六九の品種を記し、更に『さつきるひ』として、一六二の品種を挙げている。

堪囊抄に躑躅の二字をツツジの名とする

ゆえんを記しているが、これによると、羊がこの花を誤て食べ、そのために死んだことから羊躑躅の名を生じたというのである。東本草和名にも同様のことが記されている。ツツジの和名は躑躅(テキシヨク)の音にもとづくといひ、また筒咲花の略転と考へる人もある。ツツジにはヒトリグサの名があり、藻塩草に『花さけば秋かとおもふ日とり草みるにもみぢの色とまがへば』とある。古名録卷第十九に都追慈(躑躅、ひとりくさ、豆々自)乎加豆豆之(ヤマツツジ、糸都々之、仁豆豆之、岡豆々志、乎加川々之、マツツジ)毛知都々之(紫躑躅、モチツツジ、以波都々之、石菅自、石乍自、毛知豆豆之、毛知豆々之、伊波豆々之、もちつつし)之呂都々之(白菅任、白菅目、しらつつし)八重ツツジの項があり、解説が施されている。本草和名には羊躑躅に『和名以波都々之又之呂都々之一名毛知都々之』とあり、大和本草(貝原益軒)には躑躅の項に『種類近年甚多し、カヅヘツクスベカラズ々各其名アリ、三月花ヲ開ク、』とあつて、大小霧島、紫ツツジ、エド川ツツジ、紅ツツジ、山躑躅、蓮華ツツジ、モチツツジ、アサギツツジ、紫花ノ春ツツジの名が見え、和漢三才図会にも数種のツツジを載せている。新撰字鏡、倭名類聚抄、和漢三才図会などの古文獻には茵芋を岡豆々志、伊波豆々自、仁豆々之、乎加豆豆之とよむものもあるが物類品鑑、古今要覧稿には、これをミヤマシキミであるとしてい

ツツジの類は花譜に『ひかげによし』と

あるが、これは日かげに堪え得る程の意味と解釈すべきで、日の全くささぬような日かげでは、中々枯れこそせぬが、花を咲かせることなど思もよらぬ。それで強健に生育させ、且つ花をよく咲かせるには、日当りのかなり良い場所に植付けるべきである。しかし真夏の強い陽光はツツジのためには余り有難くないので、真夏の午すぎには少し日かげのできるような植付けが肝要である。ツツジの類の根には無数の鬚根があり、それに根菌が共生する。この根菌はツツジの類の生育に効果のあるものとされている。故にこの部分は移植などの時、切り損じぬようにせぬと、良い生育を望み得ない。またツツジの類は、他のツツジ科植物と同じく嫌石灰植物で、石灰分が多量に含まれる土壤では根菌の発育が不十分で、従つてツツジの類の生育が害せられることとなり、また土壤があまり乾くと生育を害することがあり、相当多量の腐植質を含み、膨軟で気水の流通の良好な土壤を好む。ツツジの類は一般に植込の下草の用途に供されるが、花が極めて多数に着き、全樹梢を覆つて咲くので、花季には甚だ美観を呈する。

ツツジの類の育苗は、取木、挿木、実生などによつて行われる。取木は春株の根元に土を盛り、または枝を土中に導いて発根させ、翌春切はなして植付ける。挿木は日かげに、新梢の稍硬まつたものを挿す。用土は赤土、火山砂、川砂などがよく、粘土を水で練つたものを、切口につけて挿すと発根がよい。ツツジの類の種実は秋、相前後して熟すから、蒴果の先端が稍口を開いて褐色となるのを度として摘み採り、干して軽くたたき、内の種子を取出し、泥炭を砕いたもの、或は水藪、或は腐葉土、腐木土などに蒔く。採蒔または春蒔とする。種子はかなり細かく、従つてそれから生ずる苗は初め極めて小さいから、取扱を丁寧に行う必要がある。

夏旱天のつづく時には、バラに行つと同じようにマルチングを施すことをすすめたい。即ち植込の根元、及その周囲に堆肥、落葉、腐葉土、鋸屑、糞殻など、適宜のものを一二寸の厚さに敷きつめるもので、これにより土壤水分の蒸散を押へ、同時に土壤温度の過度の上昇を防ぐことができ、更に土中に有機質を補ひ、土を膨軟にする効がある。このマルチングは、秋末草けずり用のホーで表土にすき込むと更によい。

花の後によく実を結ぶが、実生を行う場合を除き除らせぬがよく、花が終つたならば花部はみな摘み取り、樹勢の浪費を防ぐようにする。

植付けや移植は他の喬木のように時期をやかましくいふ必要はないが、やはり春発芽前に行つべきで、この時期が最適といえる。

枝が時によく伸び、むしろ徒長したような場合には、枝を適当に剪りつめるとよいが、その時期は花の終つた頃がよい。枝の先を切られると、残つた部分から盛に新梢を発生し、この枝には翌年花芽を生じ、その次の年に花を咲くようになる。

北大助教・植物園主任

良書紹介幹旋

花とともに40年

菊、ばら、だりあ、洋蘭、盆栽、造園
高山植物、北海道の植物花卉栽培百科

北海道大学農学部・附属植物園

石田文三郎著

定価 340円・送料30円・御送金次第急送

庭園観賞樹木

八重桜、吉野桜、山桜	1本	10本
公孫樹(銀杏)	各 70円	650円
ナナカマド	80円	605円
ライラック	80円	650円
雪柳	50円	450円
れんぎよう	50円	450円
つつじ(2年生)	100円	900円
エボタ(2年生)	100本	800円
玉伊吹	150円	1,400円
ドウダンつつじ(4年生)	90円	800円